

## 随想

# モード学園のスパルタ教育

## ～人材教育への熱意～

加藤 宏光

民放テレビ、『カンブリア宮殿』の再放送でモード学園が落ちこぼれ学生をスパルタ教育により、求められる人材を育てる、という番組があった。

谷まさる学長のモード学園は奇抜なコマージュナルで知られている。  
このモード学園卒業生は各企業に大歓迎である、という。就職率は一〇〇%。また、早稲田大学や上智大学、社会人も専門学校であるモード学園へ服飾を学びにくる。  
ここではゲームソフト、車のデザインまで学ぶ学科がある。

モード学園は一九六六年に

名古屋で開校され、専門学校では珍しい四年の教育システムをとっている。授業料も年間一〇〇万円が最低であり、かなりの高額である。しかし、一〇〇%という高い就職率を求めて入学希望者が殺到する。この就職率一〇〇%は学園が保証しているのである。

この学園は学舎を無借金で建設している。テレビコマージュナルのように建物自体が奇抜な設計で個性を主張している。学長である谷は

「この建物の個性で入学者のセンスに問いかけています」と言う。また、『環境が人を育てる』というコンセプトから学舎を都会に建設する。

現場の知識によって教育する方針によって講師は現場から採用することになっている。

専門学校は正式には専修学校という。谷は言う。

「就職は就社ではない。仕事をするのが社会人である」と。

谷は一九三六年生まれ。母子家庭であることで、就職を望んだ銀行から入社を拒否された。息子である谷からこの話を聞いて母が涙を流した。当時の社会事情では母子家庭の子供の大会社就職は困難であった。  
「これ以上母を悲しませたくない」

との思いで就職を断念し、

当時細々と経営していた母の洋裁学校を手伝いながら、デザインを学んだ。

二九歳で独自のデザインを表彰されたが、当時のアパレル品質は《安かろう、悪かろう》であった。今後のアパレル業界では品質が課題とされ、また必ずデザイナーが必要になるという信念をもとに、『アパレルにおける質の向上』を目指して、デザイナー学校を開いたのは、谷が三〇歳の時であった。

当時から講師は企業で働いた経験が必須とした。授業はビジネスの再現であるという哲学からである。

《業界に対しての教育に対

してもその事業が必要とする各部門全部を揃える」というシステムで実践授業を可能にする。この授業を介してでき上がった作品は企業で商品として市場へ登場させる。市場へ登場させることも授業の一環でビジネスの再現を完結させる最終過程である。

授業課題は年間二〇以上。どうこなすかも教育と考えている。スパルタ教育であり、三回遅刻すると一日の欠席扱いとなる。就職指導も厳しい。就職の方向指導は本人の将来を踏まえてのこと。それゆえに、学園卒業生の社会からの評価が高い。

谷は、

「学生に必要な義務は授業と課題をこなすこと。これらをこなしてさらに成果が上がらないとしたら教育の方法が悪い」

と考えている。

「難しい問題を山ほど出すのではなく、問題解決の方法を教えるべきである。義務を果

たして初めて、就職ができる(社会が受け入れる)」

とも語る。

村上龍(インタビュアー) …

何のために働くのか?

谷: 若者の役に立つことができ甲斐。学生がコンテストで優勝した時は、二九歳で自分が優勝した時より嬉しく、自分の時に流さなかった涙を流した。

以上が『カンブリア宮殿』の内容である。

谷学長に率いられるモード学園のポリシーには全く同感であり、四〇年以上前からこの哲学を一貫して教育している彼の生き様には大いに共感する。

一方、イージーにモード学園の成果に期待する企業の姿勢はこれまでの、会社における教育姿勢を捨てたのではないか。著者の若かった四〇年以上前の頃、企業は採用した若い社員を財産と受け止め、何年もかけて育成していた。三年や四年は教育期間であり、

若い社員も学ぶ姿勢からフレッシュユキを發揮していた。

しかし、疲弊した今日の大会社では即戦力としての労働を期待している。かつては耳にしなかったトップハンティングが当たり前になっている。年金問題と良質で安い労働力の供給を兼ねて六〇歳を超える人材の再雇用によって即戦力を期待する向きも多い。

確かに六〇歳が老人とされるには、現在のこの年代はまだまだエネルギーをたぎらせている。しかし、会社がゆっくりと人材を育てようとする姿勢を示していないことは、この先二〇年三〇年のわが国を考える時、心もとない。

昨日、岩手大学獣医学科の品川教授を訪ねた。平成二十二年二月に開催される食の安全に関するセミナーの打ち合わせのためである。

その折に、教授から、「今日では地方自治体が家畜保健所スタッフや屠畜検査員を補充しようとして、熱心に募集

しても、新卒獣医師は採れない」という話が出た。その理由として、教授はこう語った。

「学生は社会に出れば、嫌でも働かなければならないこと等知っている。募集に際して、現実的な業務を紹介してみても、何も興味を示すわけがない。業務を介して、どのような生き甲斐を求められるか、といった話を求めているのに」

著者も然りと思う。そして、募集する側に、語るべき夢を持っていくか否か、自体が本質的な問題だと思ふのである。養鶏業界にはなかなか人材が来ない。

それゆえに、若いスタッフが入社した場合には《一〇年をかけて育てよう》という経営者も少なくない。昨日の花形産業はすでに過酷な国際競争に追われている。

厳しい国際競争のゆえに大企業で失われた人材教育への熱意を、われわれの産業が持ち続けていることは自慢に値するのではないか。